

翠董敏明
晚泣有
井田原
土薄上蒲
集

現代日本文學全集

58



筑摩書房版

土井晩翠
薄田泣菫
上田有明
蒲原

昭和三十三年八月十日 印刷
昭和三十三年八月十五日 發行

著者

土井晩翠
薄田泣菫
上田有明
蒲原

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
古田晃

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山田一雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八
製印整 株式會社 精興社
本刷版 株式會社 精興社
株式會社 高島興社 堂

土井晚翠集 目次

天地有情 五

曉鐘 三五

薄田泣菫集 目次

暮笛集 七

ゆく春 九

二十五絃 一三

白羊宮 一五

樹下石上(抄) 一五

上田敏集 目次

牧羊神 一九

詩聖ダンテ 一七

うづまき 二七

蒲原有明集 目次

草わかば	三〇九
獨絃哀歌	三〇
春鳥集	三三
有明集	三七
土井晚翠(中野好夫)	三八三
薄田泣菫(日夏耿之介)	三八六
上田敏先生の思ひ出(矢野峰人)	三九四
蒲原有明論(矢野峰人)	三九六
解説	四〇七
年譜	四二三

装幀 恩地孝四郎

土井晩翠集

祁山悲秋の風更けを陣雲暗く五丈原
零露の文は繁く草枯れ馬は肥れど
蜀軍の旗光無く鼓角の音も今も
丞相病篤かりき

曉翠

天地有情

序

「或は人を天上に揚げ或は天を此土に下す」と詩の理想は即是也。詩は閑人の囁語に非ず、詩は彫虫篆刻の末技に非ず。既往數百年間國詩の經歷に關しては余將た何をか曰はん。思ふに所謂新鉢詩の世に出でてより僅に十餘年今日其稱感笑ふべきは自然の數なり。然れども歲月遷り文運進まば其不完之を將來に必ずべからず。詩は國民の精髓なり、大國民にして大詩篇なきもの未だ之あらず。本邦の前途をして多望ならしめば、本邦詩界の前途亦多望ならずんばあらず。本書收むる所余が新舊の作四十餘篇素より一として詩の名稱を享受するに足るものあらず。只一片の微衷、國詩の發達に關して纖芥の貢資たるを得ば幸のみ。著者不敏と雖ども自ら僭して詩人と爲すの愚を學ぶものに非ず。

明治三十二年三月

東京に於て

土井林吉

例言

一、本書に收めたる諸篇の大多數は嘗て「帝國文學」及び「反省雜誌」に掲載せるもの、今帝國文學會及び反省雜誌社の許諾に因りて茲に轉載するを得たり、謹んで兩社に謝す。

一、詩を以て遊戯と爲し閑文字と爲し彫虫篆刻の末技と爲すは古來の漸なり、是弊敗れずんば眞詩決して起らじ。一般讀者の詩に對する根本思想を刷新するは今日國詩發達の要素なるを信ず。附録は泰西諸大家の詩論若くは詩人論なり。素是諸書漫讀の際偶然抄譯し置けるもの、故に精を窮め理を竭せるには非ずと雖も今日の讀詩界に小補なくんばあらず。敢て切に江湖の精讀を請ふ。

希望

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆるとき、
夕月波にしづむとき、
黒暗よもを襲ふとき、
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。

ながき我世の夢さめて
むくろの土に返るとき、
心のなやみ終るとき、
罪のほだしの解くるとき、
墓のあなたに我魂を
導びく神の御聲あり。

嘆き、わづらひ、くるしみの
海にいのちの舟うけて
夢にも泣くか塵の子よ、
浮世の波の仇騒ぎ
雨風いかにあらぶとも
忍べ、とこよの花にほふ

港入江の春告げて、
流るゝ川に言葉あり、
燃ゆる焔に思想あり、
空行く雲に啓示あり、
夜半の嵐に諫誡あり、
人の心に希望あり。

雲の歌

ゆふべは崑崙の谷の底
けさは芙蓉の峯の上
萬里の鵬の行末も
馳けり窮めむ路遠み

無限のあらしわが翼
空の大うみわが旅路。

空の大海星のさと
緑をこらすたゞなかに
懸かる微塵の影ひとつ
見る／＼湧きて幾千里
あらしを孕み風を帯び
光を掩ふてかけり行く。

いかづち怒り風狂ひ
山河もどよみ震ふとき
天濤高く傾けて
下界に注ぐ雨の脚
やめば名残の空遠く
泛ぶ七いろ虹のはし。

曙の紫こむらさき
澄みてきらめく明星の
光微かに眠るとき
覺むる朝日を待ちわびつ
やがて焰の羽添へて
中ぞら高くのぼし行く。

しづけき夜半の大空に
はのめき出づる月の姫
下界の花を慕ひつゝ
半ば耻らふ面影は
ために掩ははむわが情

輕羅の袖と身を替へて。

照りて萬葉の花霞
花にも勝る身の粧
あるは歸鳥の影呑みて
ゆふべ奇峯の夏の空
海原遙か泛びては
紛ふ白帆の影寒く。

織ればわが文春の波
染むれば巧み秋の野邊
羽蓋凝りて玉帝の
御駕空に駐るべく
錦旗かへりて天上の
御遊の列の動くべく。

跡こそ替れ替りなき
自然の工みわが匂ひ
嶺に蹌く夕暮は
天女羅綾の舞ごろも、
断片風に流れては
われ晴空の孤月輪。

影縹緲の空遠く
ゆふべいざよふわが姿
無心のあとは有情の
誰が高樓の眺めぞや
珠簾かすかに洩れいでて
咽ぶ妻琴ねも細く。

千仞高ききり崖の
嶺に聳たつ松一本
緑の枝に寄りかゝり
風の袂を振ふとき
鳴く音すみて來るたづに
貸さむ今宵の夢の宿。

岸の柳ともろともに
水面に影を宿するとき
江山遠き一竿の
不文のひじり何と見む
思は清く身は輕く
自在はわれに似たる身の。

自然の姿とこしへに
われは昨日の我ながら
嗚呼函關の紫も
昔のあとぞ遙かなる、
帝郷遠し影白く
泛べば慕ふ友や誰れ。

星と花

同じ「自然」のおん母の
御手にそだちし姉と妹
み空の花を星といひ

わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど

にはひは同じ星と花

笑みと光を宵々に

替はすもやさし花と星

されば曙雲白く

御空の花のしほむとき

見よ白露のひとしづく

わが世の星に涙あり。

鷺

紫にはふ横雲の

露や染めけむ花すみれ

花に戯るゝ蜂蝶の

戀か恨かうつゝ世の

はかなき春をよそにして

大空のぼる鷺一羽

あらしは寒し道さびし。

春の姿はたへなれど

花の薫りはにほへども

其春よりも美はしく

雲井のをちをめざしつゝ

大空高く鷺一羽

あらしはきびし道かたし。

背には無限の天を負ひ

緑雲はねにつんざきて

飛び行くはてはいづくぞや

望のあした持ち来る

高き薫りのあとゝめて

大空めぐる鷺一羽

あらしはつらし道すごし。

嗚呼コーカサス峰高く

千重の叢雲むらだちて

下界のひゞきやむところ

天上の火を奪ひ來し

彼のたぐひか青くもの

大空翔くる鷺一羽

あらしはげし道遠し。

萬有と詩人

Aque omne immensum peragravit
mente animoque, Lucretius.

出でしわが世のあきばらけ

かざしににはふ明星の

光に琴を震はして

詩人よ君は歌ひしか。

流るゝ光しづむ影

過ぎし幾世の春秋ぞ

巖は移り山は去り

淵も幾たび替りけむ

おほあめつちの美はしき

たくみは今もむかしにて。

あゝわだつみの波の花

銀蛇の飛ぶに似たるかな

仰げば空に虹高し

虹にも酔はぬわがころ

波にもにぶきわがころ

たのむは獨り君が歌。

生ける焰のバプテズマ

浮世の塵を焼き掃ひ

雲を震はせ風に呼び

光に暗に伴ひて

大空遠く翔けりくる

詩神の歌を君聞くや。

あさ日の光りゆふ光り

かれとこれとの染め替ふる

たくみもよしや天雲の

「渾沌」よさし窮りて
時「永劫」のふところを

輕羅のころも花ごろも
曳くやもすその紅に
詩神の影を君見るや。

「泉のほとり森のかげ
光てりそふ岡」のみか
あしたの風の吹くところ
ゆふべの雲のゐるところ
露のしづくのふるところ
いづくか歌のなからめや。

流るゝ水のゆくところ
きらめく星のてるところ
緑の草の生ふところ
鷺の翼を振るところ
獅子のあらしに呼ぶところ
いづくか歌のなからめや。

春は吉野のあさぼらけ
こむる霞のくれなるも
遠日は紛ふ花の峯
夏はラインの夕まぐれ
流は遠く水清く
映るも岸の深みどり。

汨羅の淵のさぐれなみ
巫山の雲は消えぬれど
猶揺落の秋の聲
潮も氷る北洋の

巖を照らすくれなゐは
光しづまぬ夜半の日か。

路に斃れしカラバンの
枯骨碎けて塵となり
魂歌々の恨さへ
あらしにまじる大砂漠
もの皆滅ぶ空劫の
面影君はこゝに見む。

黒雲高くおほ空の
照る日の影を吞みけして
紅蓮の焰すさまじく
巖も熔くる火のみ山
あめつちわかぬ渾沌の
おもかげ君はこゝに見む。

まぼろし追うてくたびれて
しばし野末の假のやど
結ぶや君よ何の夢
さむれば赤したなごゝろ
あたりの風を匂はして
笑むはやさしの花ばらか。

涙にあまる思とは
歌ふをきゝぬ野路の花、
荒磯蔭のうつせ貝
聲なきものを何人か
海のしらべをこゝろねを

其一片に聞きにけむ。

たかねの崖に花にはひ
情波の淵に歌は湧く、
無象を聲に替ふるてふ
君が心耳のきくところ
空のいかづち何をつけ
夜半のこがらし何を説く。

夜半のこがらし何を説く、
「眠」の如く「死」の如く
やさしき鳩の羽たゆく
ゆふべの空に下るごとく
詩神の魂の降り來て
君が心をみたすとき。

夜の薫りの高うして
天地しづかに夢に入る
うちに聲なく言葉なく
またゝく窓のともしびに
風の姿を眺めては
思はいかに君が身の。

心の窓も押しあけて
眺むる空に流れくる
星の行衛はいづくぞや
清きアボンの岸のへか
咲くタスカンの花の野か
それワイマアの森蔭か。

北斗は遠し影高し
望の光り愛の色
かれにもしるき参宿の
もなかにひかりかゞやきて
(かたどる影は眞善美)
三の星こそ並ぶなれ。

坤輿一球透き通り
仰ぎて上に見るがごと
下にも光る千萬の
星の宿りを眺め得ば
下界の名さへ空しくて
我世いみじと知るべきを。

まことの光りまことの美
狹霧に蔽はれとざされて
暗にさまよふわがこゝろ
たのむは獨り君が歌
紫蘭の薫り百合花の色
爲めに咲かなん君が歌。

しらべも高くねも高く
あらきあらしを和げて
微妙の樂に替ふるてふ
君が玉琴かきならし
涙のうちにほゝあみて
暗のうちにこゝろやきて

かのオルヒスのなすところ
陰府に繋がる魂を解き
かのビタゴルの説くところ
御空に星の樂を聞き
かのプラトンの見るところ
高き理想の夢に酔へ。

註

- (一) 失樂園第三卷
(二) ヲルヅヲルス
(三) ロセツテ
(四) セークスピア
(五) ダンテ
(六) ゲーテ
(七) オライオンの星宿

はるのよ

あるじはたそやしらうめの
かをりにむせぶはるのよは
おぼろのつきをたよりにて
しのびきゝけむつまごとか。

そのわくらはのてすきびに
すゝろにあへるひとこゝろ
かすかにもれしとしびに
はなのすがたはてりしとか。

哀歌

たをりははてじはなのえだ
なれしやどりのとりなかわ
おぼろのつきのうらみより
そのよくだちぬはるのあめ
ことはむなしくねをたえて
いまはたしのぶかれひとり
あゝそのよはのうめがかを
あゝそのよはのつきかけを。

同じ昨日の深翠り
廣瀬の流替らねど
もとの水にはあらずかし
汀の櫻花散りて
にほひゆかしの藤ごろも
寫せし水は今いづこ。

心ごゝろの春去りて
色ことゝく褪めてはつ
夕波寒く風たてば
行衛や迷ふ花の魂
名残の薫りいつしかに
水面遠く消えて行く。

恨みを吹くや年ごとの

瑞鳳山すいほうざんの春の風

をへの霞かすみくれなるの
色になぞろふ花はなごろも
とめし薫りのはかなさは
何に忍しのびむタまぐれ。

暮山いちだ一朵の春の雲

緑の鬢びんを拂はらひつゝ
落つる小櫛くしに觸る袖そでも
ゆかしゆかりの濃紫こうむらさき
羅綺らきにも堪へぬ柳腰りゅうようの
枝垂しだりは同じ花の縁
花散りはてし夕空を
仰げば星も涙なり。

池のさゞ波空の虹

いみじは脆はろき世の道を
われはた泣なかむ花の蔭
其花掃はらふ夕風に

蝴蝶はてはの宿を音づれて

問はん「昨日の夢いかに」

春を誘よそふて蜂蝶はちでつの

空のあなたに去るがごと

玉釵たまざし碎くだけて星落はしちて

あはれ芳魂はなたまいまいづこ

残るは枯れし花の枝

盡はきぬは恨うらみ春の雨。

盡はきぬは恨うらみ春の雨

としび暗くろきさよ中の
夢のたゝちをいかにせむ
ありし昨日の面影に
替はらぬ笑みも含こませて
名におふ花の一枝は
嗚呼ああその細き玉の手に。

海棠

盛りいみじき海棠かいどうに
灑さらぐも重おもし春の雨

花の恨うらみ喜よろこか

問はんとすれど露もだし

聞かんとすれど花はないはず。

夕しづかに風吹きて

名残なごりの露は拂はらはれぬ

風の情なさけか嫉やうみにか

問はんとすれど露もだし

聞かんとすれど花はないはず。

無題

光り玉しく露満ちて

百合花ゆかりも薔薇さくしも蘭らんも
馨かほりあふるゝ園あらば
君が踏み行く路とせむ。

流るゝ花を誘よそひては

海原遠く香をはこぶ

清き野中の川あらば

君がかゞみの水とせむ。

夕の空に現はれて

微笑める光に塵の世を

慰めてらす星あらば

君がかゞしの珠とせむ。

清くたふとく汚けがれなく

戀も涙も憐あはれなく

みつるやさしの胸あらば

君が心の宿とせむ。

詩人

詩人よ君を譬たとふれば

戀に酔よひぬるをとめごか

あらしのうちに樂たのしき聞き

あら野のうちに花を見る。

詩人よ君を譬たとふれば

世の罪しらぬをさなごか
口には神の聲ひゞき
目にはみそらの夢やどる。

詩人よ君を譬ふれば、
八重の汐路の海原か
おもてにあるゝあらしあり
底にひそめるまたまあり。

詩人よ君を譬ふれば
雲に聳ゆる火の山か
星は額にかゞやきて
焰の波ぞ胸に湧く。

詩人よ君を譬ふれば
光すゞしき夕月か
身を天上にとめ置きて
影を下界の塵に寄す。

夕の思ひ

“Où va l'esprit dans l'homme ? Où va
l'homme sur terre ?
Seigneur ! Seigneur ! où va la terre
dans le ciel ?”

—Hugo: Les Feuilles d'Automne
“O life as futile, then, as frail !
O for thy voice to soothe and bless !
“What hope of answer, or redress ?”

Behind the veil ! behind the veil !”
—Tennyson: In Memoriam.

(一)

思^{おも}入日を先きだて、
たそがれ近き大空に
うかびいざよふ雲のむれ
暮行くけふの名残^{なごり}とて
見るめまはゆきあやいろを
染むるは何のわざならむ。

あるは幾重の空のよそ
あるは幾重の嶺^ねのうへ
かろく流るゝくれなゐは
セラフ、ケラブの旗を見せ
ゆるく蹶^{たふ}びくむらさきは
あまつをとめの裾や曳く。

夕^{ゆふ}の空の上

替^かるも、ちの面影を
替らぬ愛に眺^{なが}むれば
たゞ聯想の端となる
雲よ自在のはねのして
いづくのはてに翔けり行く。

あゝ夕雲のかけりゆく
空のあなたぞなつかしき
心の渇きとらむべき

そこに生命^{いのち}の川あらむ
眞理のかどを開くべき
そこに秘密の鍵あらむ。

嗚呼^{ああ}夕雲のはねのうへ
たれか「涙の谷」棄て、
荒鷲^{きりぎりす}翔けり風迷ふ
空のあなたに飛行かむ
浮世の暗にしられざる
光はそこにてるべきに。

花より花にむれとびて
蜜を集むる蜂のごと
星より星に光をと
飛行^{ひこう}く魂を眺めけむ
詩人^{しじん}のくしきまぼろしを
たれかうつゝに返すらむ。

(二)

消えしエデンの花園の
おもわは今も忘れず
ほす味にがきさかづきの
底なる澱^いに酔はんとて
塵の浮世^{うきよ}に塵の身は
かくもいつまで残らむ。

涙の谷にさまよひて
ねね夜の夢に驚けば
こゝにバイロン血に泣きて

「死と疑の子」となりの
こゝにシルレル聲あげて
「理想は消ゆ」と叫ぶなり。

アポンの流しづかにて
すゞしく月を宿せども
見えぬそこひに波むせび
グラスメヤアの水面にも
うつる此世の影見れば
たゞ海神のなつかしや。

さればラインの岸遠く
思をこめて人は去り
ゼネワの夏の夕暮は
よその恨の歌を添へ
深き嘆はネーブルの
波も洗ひや得ざりけむ。

波に照れとて空の月
花に舞へとて春の蝶
「自然」のわざは妙ながら
世に苦めと塵の身を
暗に迷へと玉の緒を
つくる心のしりがたや。

かゞやく星に空かざり
玉しく露に地を粧ふ
神にたづねむいかなれば
なまじの絆人の子の

心に智慧の願あり
胸に悟の望ある。

(三)

荒れのみまさる人の世に
せめては匂ふ戀の花
脆きはたれの咎ならむ
星の眸月の眉
たゞ思出の種として
いづく消行くまほろしぞ。

母の乳房にもたれつゝ
宿すもゆかし春の夢
見なば魔王もあみぬべき
稚子の眠りもひとゝきや
やがて寄來ん世のあらし
つらきあらしのさますらむ。

つらきあらしを譬ふれば
陰府なる門のきしりかも
脆き、弱きをにへとして
いけるをきほふ世々の聲
うちに恨の叫あり
うちに憂の涙あり。

民のもゝちの骨枯れて
ひとりのいさを成ると説く
それにもまして痛はしき
個人の嘆と悲と

涙と血とに買はれたる
社會の榮はたがためぞ。

時劫の潮とこしへに
寄するあら波返る波
浮きて沈みて末つひは
たゞうたかたのよゝのあと
いづれの時かいつの世か
亂れ騒ぎのなかりけむ。

世界の富を集めたる
ローマの榮華夢と消え
こがね鍔はめ玉しきし
ニネブ、バビロン野と荒れて
砂上につきしバベル塔
今はた何を残すらむ。

嗚呼人榮え人沈み
國また起り國亡び
かくて廻りて極まなく
かくて流れてはてもなく
時よ浮世よいづくより
時よ浮世よいづくゆく。

(四)

ひとり思にかきくれて
たゞずむ影もゐる雲も
消えてむなしき夕まぐれ
神の慈愛のまなじりか

みどり澄みゆく大空に
はやてりそむる星のかげ。

あゝなつかしの星の影

夢と過行く人の世に
猶「永劫」のあと見せて

あめとつちとの割れけむ
むかしのまゝにとこしへに
わかき光に匂ふかな。

其永劫の面影を

仰げば我に涙あり

高くたふとく限りなき
靈のいぶきに扇がれて
空のあなたにかげとむる。
「望」のあとに喘ぎつゝ。

天には光地には暗

あひにさまよふ我思ひ
浮世の憂を吹寄せて

あらし叫びぬ「惱」^{なげ}と

神の光榮をほのみせて

星さゝやきぬ「望」^ぞと。

註

- (一) ダンテ「神曲」中「天國篇」を見よ。
- (二) セルクスピアの故郷の川。
- (三) ヲルヅヲラスの住所の傍にありし湖。
- (四) プロテアス及びトライトンを指す、有名なる、
The World is too much for us の歌を見よ。
- (五) 「チャイルド・ハロルド」第三篇第五十章及其

續きを見よ。

(六) ラマルティン此處にバイロンを見後日當時を逗
想して「人間」と題する沈痛悲壯の詩を詠す。

(七) セイズ : Stanzas written in dejection,
near Naples.

岸邊の櫻

春靜かなる里川の

岸のへ匂ふ花櫻

水面の影にあこがれて

涙灑げる幾たびか。

おのが影とも花知らず

光のどけき朝日子に

姿凝らして水面を

あゝ幾度か眺めけむ。

影ものいはじ水去りて

いつしか老ゆる花の面

うつらふ色を眺めては

思やいかに夕まぐれ。

春も空しく暮去れば

梢離れてあゝ花よ

水面の影と逢ひながら

行くへはいづこ末遠く。

花一枝

ラインの岸に花摘みて

別れし友に贈りけむ

詩人を學びわれもまた

君に一枝の夕ざくら。

あしたの柳露にさめ

ゆふべの櫻風に酔ふ

都の春の面影を

せめては忍べとばかりに。

通ふ鐵路も末遠く

都の春は里の冬

玉なす御手に觸れん前

萎み果てむかあゝ花よ。

萎み果てなむ一枝を

空しく棄てむ君ならじ

心の色に染めなして

寢覺の窓にゑましめよ。

夏の面影

夢

韓紅の花ごろも
 然ゆる思とたきこめし
 蘭麝の名残匂はせて
 野薔薇散り浮くいさゝ川
 流の水は浅くとも
 深し岸邊の岩がねに
 結ぶをとめの夏の夢。

よその高峯の夕霞
 何にまがへてたどりけん
 羅綾のしとね引換へて
 今は緑の苔むしろ
 水とこしへに流去り
 花いつしかと散りぬれば
 夢か昨日の春の世も。

のぼる朝日に照りそひて
 色なき露も色にほふ
 眺めまばゆきあさばらけ
 若葉のみどり夏深き
 梢はなるゝもゝ鳥は
 我世たのしと鳴くものを

さめずやあはれをとめごと。

鳴くや杜鵑のひと聲に
 五月雨いつかはれ行けば
 ちぎれ／＼の雲間より
 やがてほのめく夏の月
 銀輪露に洗はれて
 我世すゞしとでるものを
 さめずや哀れをとめごと。

螢飛びかふ夕まぐれ
 すゞ風そよぐ夜半の空
 流れ流るゝ谷川の
 水の響はたえねども
 水の行くへは替れども
 覺めずやあはれなが胸に
 燃ゆる思の夏の夢。

夏夜

静けき夏の夜半の空
 遠き蛙の歌聴けば
 無聲にまさるさびなれや
 眠を誘ふ水の音
 心しづかに流るれど
 夕月山に落ち行けば
 影を涵さんよしもなし。

星夜の空の薄光り
 心を遠く誘ひつゝ、

すゞしくそよぐ風のねは
 神のかなづる玉琴に
 觸れてやひゞく天の樂、
 昨日の夢と悲みし
 浮世の春は替はれども
 見ずやとこよの春の花
 散らでしばまで大空の
 星のあなたにはゝゑむを。

光

"Hail, holy Light, offspring of Heaven,
 First-born !
 Or of the Eternal coeternal beam !"

— Milton

くしき天地の靈となり
 我世にありて道となり
 心にありて智慧となり
 迷を破り暗を逐ひ
 望をおこし愛を布く
 光仰ぐもたふとしや。
 清くいみじく比なく